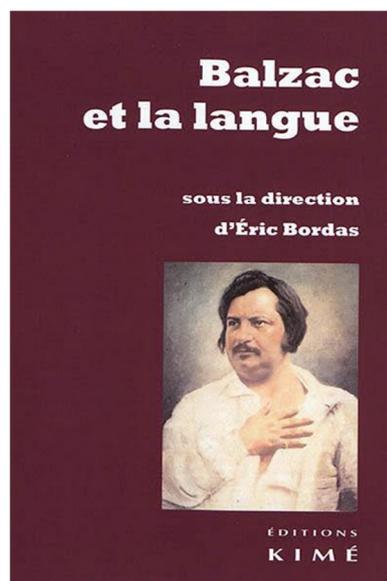


Éric Bordas (dir.), *Balzac et la langue*, Paris, Éditions Kimé, 2019, 324 p.

本書は国際バルザック研究会（GIRB）の同名のシンポジウム（2018年6月15日、於パリ）の報告集である。バルザックにおける言語の問題は研究主題として古くかつ新しい。伝統的研究では『人間喜劇』の作者に対し「悪文家」という評価が定着していたが、そこには小説言語を経験的な文法規範の次元で裁定する偏見が蔓延していた。しかし20世紀後半になると言語学と文体論の進展を受けて事態は一変する。バルザックにおける言語＝文体の問題を小説の発話構築の効果の問題として捉え、その小説言語の複雑性、とりわけ多声性を評価分析する試みがなされるようになったのである。この展開を中心的に推進したのが本書の編者E・ボルダスであり、実際、本書の主旨もこうした20世紀末以後の研究の延長上にある。バルザックと言語（諸言語）の問題をめぐる

新たな開拓領域としてここでターゲットとされているのは、小説家の言語学的知識と実践、多種多様な作品群における言語形式の独創性、作中の語彙や語法の社会的射程の問題である。さらに、後世の作家や翻訳家から見たバルザックの小説言語の特性へのリアクション（受容）の問題が加わる。全14名の論者たちが多彩な方法論を用いてこれらの問題への接近を試みており、大別すると言語学的分析、文体論的分析、生成論的分析、翻訳論的分析がなされている。ここに日本人研究者3名の参加が含まれる。柏木隆雄による日本におけるバルザックの翻訳の歴史的展開の分析、松村剛による『コント・ドロラティック』の語彙分析に基づく既存のエディションの再検討、鎌田隆行によるバルザックの生成資料における言語の特徴分析である。発表者の一人としてバルザック研究の新展開の場に立ち会うことができたのは幸甚であった。本書の序文に集約されているように、歴史的・学際的に多岐にわたる論点を明快に整理しながら運営と編纂を行なった編者ボルダスの労を多としたい。



鎌田隆行

(共著者自身による紹介)